



坂本 繁二郎像 多々羅義雄 (1894~1968)

洋画家  
多々羅義雄のこと

谷口治達

季能古博物館だより

発行  
財団法人 亀陽文庫  
能古博物館  
〒814 福岡市西区  
能古522-2  
☎(092)883-2887

能古島生まれの洋画家多々羅義雄について福岡市では意外に知る人が少ない。一つには地道な画業であったため、また一つにはずっと東京に住み、その上、画家としての盛期が戦中戦後の混乱期と重なって、郷土福岡で盛大に画業を披露する機会が乏しかったためだろうと思う。

昭和四十三年(一九六八)十二月、多々羅は七十四歳で亡くなった。その九年後、折から建設準備中の福岡市美術館がプレ・ミュージアム事業として、生涯の作品から六十余点を選び、渡辺通りの秀巧社ホールで遺作展を開催したが、それが多々羅の郷土におけるほとんど唯一の大規模な展覧となった。

私は最晩年の多々羅に一度会ったことがある。昭和四十一年秋、旧福岡スポーツセンター前にあった新天町画廊の主人豊原が案内して西日本新聞社を訪問された。私は当時、同社文化部に勤務し駆け出しの美術記者でその応待に出た。

「これから八女の坂本繁二郎先生にお目にかかりに行く」という話であった。多々羅は既に太平洋美術会を退き、昭和二十七年に自ら組織した光陽会の会長であり、豊原はその会員だった。

また豊原は坂本繁二郎を囲んで月に一回開かれる絵の批評会の新人会の熱心な常連であり、坂本とじっこの関係だったことから、その仲立ちで多々羅が坂本に会うことになったのだと思う。

もっとも多々羅は東京の太平洋美術研究所において坂本の後輩に当たり、その他浅からぬ縁があるので、その時が初対面か、それとも過去に既に会って久しぶりの面会だったのか今では定かでない。

だが画歴によると、坂本を訪問の後、坂本と共に高良山背後のケシケシ山に登って青木繁記念碑を訪ねている。このことは、画家が大いに意気投合し、とりわけ坂本の方が心弾んで「ケシケシ山に行ってみよう」ということになったと考えるべきだろう。

この記念碑は戦後間もなく坂本が画商の久我五千男と協力して築き、青木の著名な遺書の「わが遺骨はケシケシ山の頂きの松の根方に埋めてほしい」という悲痛な願いに応えたものである。

わが国は筑紫の国や白日<sup>ヒツコ</sup>別母<sup>ワカ</sup>います国<sup>クニ</sup>極多<sup>タカ</sup>き国

の青木の歌が坂本の筆で全文平が



な文字で自然石の碑に彫り込まれている。坂本と多々羅はこの碑の前で青木の思い出を語り合って、尽きなかったに違いない。時は秋、ケシケシ山から見渡すと往時ほど多くはないにせよ、筑後平野に槿紅葉があちこちに望まれたことだろう。

多々羅はその二年後、坂本も三年後に亡くなる。両画家も人生の深秋にあったのだ。

話は元に戻るが、多々羅に会って私も青木繁について熱心な質問を浴びせたものだ。その数年前、多々羅が西日本新聞文化欄に寄せた「青木繁のこと」(昭和三十八年十一月五日、六日付)の上下二回の文を鮮烈に覚えていたからだ。温厚な老画家はにこやかに懐しげに答えてくれたのを今もありありと思ひ浮かべることができる。

「青木繁のこと」は明治四十三年(一九一〇)夏、佐賀県小城での思い出が書かれている。多々羅は十六歳、青木二十八歳。その記述は細やかで具体的で、多々羅がいかに青木に接した記憶を大切に、胸中に回復して抱き続けて来たかが分かるようである。

その夏、多々羅少年は小城中の絵の教師平島信宅に滞在し指導を受

けていた。そこへ平島を頼って放浪中の青木繁がやってくる。

能古島の絵好きの少年がなぜ平島を当初の師としたのかははっきりしない。平島は福岡の生まれであり、何



能古北岸風景 多々羅義雄 (1894~1968)

かの縁があったのだろう。

平島は小山正太郎の画塾不同舎に学んでおり、そこで青木と知り合っている。恐らく坂本とはもっと長く、不同舎が太平洋美術研究所と名を變

えるまで一緒に学んだはずである。

不同舎から太平洋美術研究所を通じて、小山正太郎はもはや老境ではとんど指導せず、実際の先生はその弟子の中村不折、満谷国四郎であつた。坂本繁二郎も

回想している。平島も満谷に師事し、やがて多々羅を紹介し太平洋美術研究所に進ませることになる。満谷は

多々羅の生涯の恩師となるが、青木、坂本らにとつても一時的な師であつた人である。

「青木繁のこと」には青木、多々羅の接したいろいろのできごとが語られてはいるが、中でも青木を釣りの名人と書いている。ハヤ釣りの巧さに

目を見張っている。そして青木には小流れに釣<sup>つ</sup>を流して手を束ね肥前の国は小城に釣する

の歌がある。前記の歌も含め、こ

の頃多くの歌を残している。青木には同名「義雄」という年の違う弟がいて、それだけに多々羅を弟同様に愛したと思われ、この一文をほのぼのとしたものにさせている。

今読み返して強く感ずるところを二、三挙げてみると――

第一は多々羅義雄の描写の巧さ案じさである。釣り、魚取り、柿取り、スケッチ、山里の旅など諸情景をいきいきと伝える。

多々羅少年が接した青木繁は放浪の果て、実際は肺結核発病寸前、あるいは既に発病していたはずで、半年後には生命の灯が消える時期だった。どこか暗影が漂っていたと思える。しかし多々羅の描く青木像はどこまでも清鮮で力強い。対象をこのようにより良くより清く見ようとするロマンチックな目があり、それが多々羅の絵画にも一貫しているように思う。

第二は多々羅が自分の兄の光に青木と一緒に上京したいと相談をするくだりである。青木はその兄にスケッチと多々羅少年を伴いたいという手紙を出している。

兄光は「青木さんは天才なんだ」と言い(お前は)「まだまだ着実に勉強せよ」と戒め、結局多々羅少年



は(平島先生の紹介に従って)「満谷国四郎先生につくため上京した」とある。

多々羅少年は青木繁に従って上京したかったし、それに胸のときめくものを感じていた。しかし兄が、当時早くも青木を天才と認めるけい眼を持ちながら、青木の天才ゆえの危険をも察知し、弟に堅実な満谷国四郎への師事を勧めるところは実に興味深い。

この兄の光の美術的感覚が次弟の義雄、さらに次の弟の間所一郎(養子)にも絵を学ばせる理由ではなかったか。能古島出身画家の遠因はこの兄にあったと言えそう。

もう一つ——明治四十三年秋、青木と別れて上京した多々羅少年は翌年三月青木の病死を知る。

「それを思うとわたしがあのとときもっと積極的に郷里の福岡市能古島に招いていたら、病状も悪化しないですんだのではないかと思う。島は平和な、あたたかいところだから」と記している。多々羅義雄はそういう優しい悔いを青木の没後五十年以上も抱き続けていたのである。多々羅は満谷国四郎に師事し、太平洋美術会展を足場に文展、帝展でも活躍する。満谷も穏やかな師であ

り、多々羅はやがて師のアトリエを譲り受け、自宅に移築して生涯、そこで描き続けた。篤実清雅な人柄である。だがその底には、常に少年の日に接した青木繁のめくるめくような芸術のデーモンに魅惑された熱いものが流れていたのである。

### 能古島と萬葉集のことなど

人物も風景も、苦渋や激情を感じさせぬ抑制した描法で、その点、穏和で地味な画風を思わせるのだが、ふとその色彩にひきつけられる。緑、赤が愛用され、時に大きな色面をなし、濃く深い色調になっても濁ることなく、ピロロドのようなあたたかく鮮やかなきらめきを持っている。黄色を含めたそれらの原色が支えあって画面を豊かに満たしている。

その色彩の深みの底に、少年の日青木繁から点火された妖しい芸術の業火が燃えているように思う。

能古博物館に集められた多々羅義雄の数多くの遺作は「平和であたたかい」ふるさとの島の風土の中で安らぐことだろうが、能古島が咲かせるとどんな花にも劣らず美しく清らかなで、その上、静かに対話すれば熱く妖しく語りかけてくるに違いない。

### 古川善久

「能古島(能古浦名所也。或能解浦とかけり。今は残島と書)。

朝野群載には那珂郡とし、藻塩草は志摩郡とす。共にたがへり。此島は早良郡の正北にあり。那珂郡、志摩郡にはへたりぬれば、早良郡に属すべし。故にいまは早良郡とす。福岡より海上二里あり。島のめぐり二里二町廿三間あり。東西四十五町、南北三十町、高さ一町廿四間、藩山

芒を生ず。村人は刈販て家産とす。是を買者は屋のふきかやとし、薪とす。村中に白髭大明神の社あり。是住吉の明神也。村翁の説に、神功皇后異国より御帰の時、此島に住吉の神霊を残し留めて、異国降伏をいり給ふ。よって残島といへり。いにしへは此島に牛の牧有し由、延喜式

二十八巻に見えたり。又此島より申西の方に、雑司島有。小さき岩山也。

洞穴あり、申西より辰巳に通れり。其上に壹尺餘なる榎柏など生せり。此島より辰巳一町半許にぬれきぬと云瀬あり、俗に龜瀬といふ。

凡此島は唐泊にむかへり。故にから泊り能古浦とよめり。古歌には所をへたてたれ共、近き所を一首の内につらねよみし例多し。(中略)世良崎残島の北なる出崎也。今はあやまりて荒崎と云。

おきつとり鴨といふ船のかへりこはやらの崎もりはやくつけこそおきつとり鴨といふ船はやらの崎たえてこきくときかれこぬかは萬葉集に云、右筑前国志賀白水郎歌十首。

或曰。筑前国守山上憶良作「此歌」



と。今其内也良崎をよめる二首をここに残す。」

右は貝原益軒の「筑前国統風土記」の文章である。

也良の崎(旧早良郡、現福岡市)の題で筑紫豊氏も『九州万葉散步』の中で右の二首の歌を引き、「沖の水鳥の、鴨といふ名の船が帰って来たら、也良の岬の番人は早く知らせてください。」「沖の水鳥の、鴨といふ船は、也良の崎をまわって傍いで来ると言っても来ないかなあ」と解をつけられてゐる。「この二首の歌はすでに志賀島のところに引いたのであるが、ここでは「也良の崎(也良が崎)の探訪を主として書いてみよう。」として、これをとりあげられる。

現在は姪浜の渡船場の位置も変り、能古島の現場もこの文章が書かれた頃と違って了てゐるが、当時(昭和三十年代前半頃)の模様を偲ぶ意味から次のとおり、そのまま引用する。「島について、博多湾内の風景をたのしみながら右手の道をたどること四キロ。玄武岩の割り石を、無造作にまきちらした、爪先上がりの島道は、すこし歩くのに難波するが途中、北浦(ここには山上憶良が築いたといふ城跡もある。)土手崎を経て牧

の神のキャンプ場に至り、さらに北にすすむと、也良崎(荒崎ともいう)の無人灯台に近い台に出る。標高一二五、三メートル、このあたりか



能古島

この歌のあるゆえんである。

大化改新後、対島、老岐、筑紫に防人をおいたといふことは文献によって知られているが、これらの島や国のどこに防人が

ゐたかといふこととのわかる資料は、この歌の也良の崎をのぞいては、まったく防人の歌のなかに、筑紫とさし、対島とよんだ歌詞はあるが、防人が筑紫にあって大宰府をかなめとして、どのように展開したものであるのか、そのやうなことは防人の歌では、かきもくわからないのである。それは萬葉集中の防人の歌が筑紫地方でよまれたものがなく、ほとんど、東国の風土の産物であることへからして、当然の帰結であるといへばいえるのであろうか。

周囲十二キロの能古の島は、意外

に淋しい島であるが、刀伊の賊(あまの)の来寇や蒙古襲来などの歴史とともに、博多湾頭の忘れてはならぬ島である。船着場から東部落の方へすこし行くと、旧藩時代の御用窯であった能古窯跡があって、その窯跡をのぼりつめた見晴しのよい丘の上に、元福岡市長であった小西春雄氏の筆になる「能古の亭」の万葉歌碑がある。しかし、これは、惜しいことに場違ひのところにてたてられたもので、能古の亭といふのは、韓亭のことであって、能古の島にある亭ではないのである。畏友柳井道弘に「能古島」といふ文章がある。これは「能古島通信」第一集昭和五十年青葉号のものである。

(前略)

「志賀島西岸の蒙古首切塚の丘からの眺望を楽しみながら、萬葉集に歌はれた也良の崎はどのあたりだろうか」と能古の島影をあかずながめてゐたものでした。

沖つ鳥鴨といふ船の還り来ば也良の崎守早く告げこそ」

彼もこの歌を挙げてゐる。

(中略)

「歌人として名高い名門の相伴旅人が神龜年間大宰帥として赴任して



きますと、わが萬葉集に筑紫歌壇が出現します。萬葉歌人として知られた山上憶良も当時筑前守としてこの地にゐました。萬葉集卷十六にあるさきの歌は「志賀の白水郎」十首のうち一首で、左註によると——神龜年中に宗像郡の宗像部津磨が対島に糧を送る船の拖師に任命されたとき、あまりに年老いてゐたため志賀の海人荒雄に身代はりを頼みました。そこで荒雄は松浦郡美称良久から対島に向けて出発しますが、途中暴風雨にあつて溺死します。

この荒雄の死にあつて妻子はかなしみにたへずこれらの歌をつくつたと註したあとに『或る人の言はく、筑前国守山上憶良臣、妻子の傷を悲感しび、志を述べてこの歌を作れりといふ』とつづけてゐます。

(中略)

「さて、ぼくらの同人誌『ポリタニア』の編集長檀一雄氏が、この能古島で静養中とうかがつたのは昨年(昭和四十九年)の初夏のことです。

東都の片隅にある精義堂医院の一室で、同人の林富士馬、真鍋呉夫の両兄と氏の病状を案じ、たしか婦人画報に載つた氏の「王様と召使」と題する一文についてそれぞれの感慨を語りあひ、氏の回復を祈つて、氏

の年譜における『能古島時代』といはれる創作活動を深切に願つたことでした。

それからまもなく、福岡の背振山麓に住む友人の入院手術の知らせを受け、つづいて手術後の経過もよく漸く危機を脱したとの便りを夫人からもらつて愁眉をひらいたところに、九州の各地に出張することになり、空港から直行して病院に友人を見舞つたあとで、島の檀氏に電話して、はじめに能古島を訪れたのでした。昭和四十九年十月十七日秋晴れの日の夕景のことであります。

地誌の貝原益軒翁、萬葉紀行の筑紫豊氏、詩情の紀行記の柳井道弘雅兄の文中にいずれも、萬葉集の歌が索かれてゐる。

能古島住人の高田茂廣氏の『能古島から』の中にも勿論『防人の歌』

として、「能古に防人がいたといふ事実。それをわれわれ能古の者は誇らしげに語るのであるが、では本当にいたのであらうか、といふことになると、それを証明するものは、私の知る限り次の一首の短歌しかないのである。」として「沖の鳥鴨といふ船の帰り来ば……」をあげられる。防人の歌についての考証、己れ的好习惯防人の歌を多数引用されてゐる。

文中次のやうな章句がある。  
「筑紫なるにはふ兒ゆゑに陸奥の可刀利をとめの結び紐解く」

この歌は、防人が任地―筑紫―で歌つた唯一の歌である。万葉集の中の載せられた場所も卷十四であり、東歌の陸奥の国の歌三首のひとつとして載せられている。

防人の中には、任地に留まつて東国へは帰らなかつた者もあるといふから、この歌の作者なども、さしづめそのひとりかも知れない。

能古の山中、特に也良崎に近いあたりを歩いて詩情にふけつてゐるとき、ふと、お百姓に出会つて防人を感じることがある。能古の人々の血の中に、防人の血が混じつてゐるのであらうか。あるひは、それほどに、也良崎の自然は昔を保つてゐるのであらうか。

私は冬の也良崎が好きである。能古島にも時には雪のふぶくことがある。そんな日の也良崎の散策は、確かに私一人の天地であり、はるかな海鳴りが誰はばかりともなく兵士―防人たちの声を運んで来る。

(中略)

しかし、也良崎に立つて私が思ふのは、やはり防人のことだけである。なぜか、それはそこに生きた兵士が

歌を残したかどうかにかかわるようである。万葉のころの兵士たちは歌人であった。それはすばらしい事実である。どんなに苦しからうとも、心に歌をひびかせる余裕があつた。私たちはどうだろう。少なくとも数十年前まではあつた船歌や田植え歌などといった労働歌までなくなつてしまつてゐる。機械がそれをさへさるのである。

豊かさを、金だけで測らうとする生き方に、文化国家日本の民であるわれわれは、今一度メスを入れてみる必要があるのではなからうか。」  
伝説、記録ほかその文は、この島に海遊びや宴を開きにゆく人たちにとつてはこの西日本新聞社刊の本はよい能古島手引き書であらう。

わたしは檀一雄さんの「花逢忌」をはずれて絶句となつた「花に逢はん」ため唐泊の見える方の山桜の並木のある道を辿つて春と、夏の落日を見るために、そして、もがり笛の冬の三度その道を辿る。帰りぎわに旧檀邸で一酌して出船の時間を待つのがここ数年のならひである。

展望台に登ると、歴史にからまる多くのものが見渡せる。

萬葉集の中に多くの歌を残す志賀島、立花一族の名の出た立花山、遠



く背振連峰、近く油山、飯盛山、真備の築いた怡土城のあった高祖山、本尊千手観音像、インド僧正賀上人自刻像など重文のある大悲王院千如寺の雷山（ここには神籠石もある）、海を見渡せば怡土、志摩の海辺、遣唐使、遣随使、遣新羅使の通った跡所、高杉晋作や野村望東尼にかかわる姫島、そして玄海島、……などな



「お多福」 少菜自題画 (42.8×31.5cm)

はじめに

### 江戸時代女性の社会的地位

大昔、日本女性の地位は決して低くはなかった。

ど、歴史を案じ、詩情をそそる海山が見はらせる。

この島に博物館が出来たことはまことに慶賀すべきことである。

(注)

1、朝野群載

平安時代の詩文・詔勅・宣命・対策・牒書・公文・史葉類を類別編集した書  
永久四年(一一一六)の自序。もと三

十巻、うち九巻散逸。三善為康編。

2、延喜式

三代格式の一、五十巻。醍醐天皇の詔命によって延喜七年(九〇七)編纂着手。二十年を要し延長五年(九二七)完成。古代を知るに最も重要な書の一つ。

3、刀伊の賊

韓語で夷狄の称であるが、沿海州地方に住んでいた女真族のことを日本では

刀伊と呼ぶ。後一条天皇の寛仁三年(一一一九)、五〇艘余の船に乗って彼らは高麗、対馬、壹岐を襲い、筑前怡土郡を侵す。

4、もがり笛

冬の激しい風が柵や竹垣に吹きつけて発する笛のような音。なお、檀一雄絶句は「もがり笛いく夜もがらせ花に逢はん」で島の絶景の中に碑が立っている。

## 閨秀 亀井少菜伝 (一) 庄野寿人

神代伝承の中心は女神「天照皇大神」であり、そのほか女人の神々の活躍も多い。また、古代の日本を中国の史書(魏志、後漢書など)が証明する「卑弥乎」の存在など、女性が一国の象徴または統治者であったことがわかる。

奈良朝では女帝(天皇)の君臨がしばしば見られ、次で平安時代になると、現代に貴重な古典文学とされる「枕草子」や「源氏物語」などを

著わして男性もおよばぬ教養と才能をもった女性も多い。彼女たちには

精気があり、行動も自由奔放で、とても男の風下に立つことはない。

しかも、これらは上級貴族の社会だけでなく、庶民生活にも同様であったことが風俗絵巻などで見られるのである。

つづく武家政治に入る鎌倉時代では、地方の地頭として女人が存在しその一所懸命の主張を一族一党の頭

領として堂々とまかり通した。

ところが戦国時代をへて江戸期の幕藩体制になると、急速に女性は社会的地位を失う。その上に人間的に卑下されるまでに至る。

こうした原因は、多分に仏教の影響があり、さらに儒教によるものとされるが、いまはこれを論じないことにする。

このような女人軽視の因習は江戸時代(約二五十年間)の泰平に固定化し、このために女の自由と個性は極端に抑制され、はなはだしくは日用の読み書きも必要ないとされるまでになった。これでは女性の社会的活動はもとより、わずかに男性の娯楽の対象とされる芸能のほか文化的教養などあるべくもない。少しでも目立つことがあると「女のくせに」





少琴画 高士遊歩図 (13.7×19.4cm)

とか「女の分際で」として扱われる始末であった。

例外として、女流の俳人、和歌や絵画などにかぎって多少は注目される存在はあっても、武士の武芸と同じく、学問もすべて男の分野とされて、女性の漢学者、詩人など全然見られない時代となる。

徳川の幕藩体制は文治主義とされるが、その基調としたのは朱子学(儒教の一派で一般に道学といわれる)である。この教義を巧妙に延用して、まず士農工商の身分制を定めて、これに付帯する分限(身のほ

ど、地位に相応する生活などのきまり)のすべては、人間が生れながらのもの、つまり「天分の理」とする絶対観念によらしめた。

この支配層である武士社会にも身分と階級の厳しさがあり、すべて個人から天下に及ぶ「修身、齊家、治国、平天下」の道理と政治を垂直化した思想に立つ教育が朱子学の特徴であった。また「理先後気」を唱えて、人間は天性(生まれつき)道理をそなえており、邪の気は後天的である。このため理(道義)を犯す者を処刑、抹殺することは天意による

とする掟を根元にした。

こうした支配体制の教育(朱子学説理)は、まず「孝経」に始まり、論語、孟子、大学、中庸の四書、さらに五経(詩経、書経、易経、春秋、礼記)を原典とする。これらの中国哲学である学問は、難解さもあって、とかく仏教の「お経の棒読み、そら読み」式の記誦暗記が普通であった。女性の学問など無縁のこと、せいぜい「かな文字」が読めればよし、良家の子女は琴、生花、仕舞、和歌とその書風をたしなむことがあっても、中国古典の漢籍(中国の書物)を学んで、漢文の文章や詩をつくるなど、かえって不都合にされかねないといわれる時代であった。

こうした儒教社会と女性地位の劣等にあつて、日本の儒学史に筑前亀井学派として認識される中で、閨秀「亀井少琴」が男性社会ともいうべき学者に伍して、その学力を現代に証明できることは、まさに稀有の存在とされるものである。

江戸時代も幕末になると、女流の漢詩人として「頼山陽」の愛人であったとされる「江馬細香」、また勤王志士としても有名な漢学者「梁川巖」の妻で、幕吏の追及と責苦にも屈しなかった女丈夫「紅蘭女史」な

どがあるが、本領の学問ではとても少琴先生におよばないと思う。

ただ残念なことは、少琴が九州の一隅にとどまって中央に出なかったこと、これが全国に知名を得なかった原因にもなる。

しかし、学界では少琴の学力は詳細に評価され、また一般には福岡地方と全国の好事家に早くから彼女の詩書と、その余技であつた絵画(文人画)が好評、珍重されており、これらが少琴の学問と教養、格調と気品になって評価と認識を高めている。さて、ここで彼女を一般に有名にした一挿話を紹介しよう。それは、少琴を語るに必ず出る彼女自作といわれる次の詩である。

九州第一の梅  
今夜為君開  
欲知花真意  
三更踏月来

九州第一の梅

今夜、君が為に開く

花の真意を知らんと欲せば

三更の月を踏んで来れ

かねて求愛されていた男性に艶麗、かつ大胆に答えながら男を誘った詩



である。このために、厳格な漢学者の「男女七才にして席を同じくせず」とする家庭の子女に絶対により得ないとして、少琴作詩を否定する意見も多く、未だその断定がされない詩である。

本稿は、章を追うてこの結論も得たいとするものである。(次号につづく)

少琴画彩色「菊図」(21・3×28・9cm)



少琴作「お多福」自題詩の訓讀

「圖象写形万古仰止」

「象(かたち)をえがき、形(すがた)を写し、万古(おおむかし)から仰止(あおぎしたう)していますのよ」

少琴が「お多福」に呼びかけた言葉である。

●少琴画の見どころ

少琴画の署名は、少の字に特徴がある。少の字の第四画が左真横に直線的に勢いよくハネるような筆法を見せる。また絵も閑達な筆使いで勢いがある。四君子(梅、蘭、竹、菊)の図柄が多いが、その中で比較的に蘭は少ない。少琴の筆勢が蘭を不得手にしたとも考えられるが、四君子の図以外にいろんな図も画がき練達を見せる。

今回の「お多福」、「高士遊歩図」など、その一つであり、また本誌の「菊図」に見られる色彩も使用する。

少琴絵には偽物もある。しかし右に述べた特長をよく認識、吟味すれば判別されると思う。

夫君の雷首山人の詩賛が加わった作品も多いが、これにはまず偽物はないとしてよい。(庄野)

今号執筆者の紹介

谷口 治 達 氏

「多々羅義雄のこと」

前西日本新聞社編集委員

九州造形短期大学教授

当館専門委員

古川 善 久 氏

「能古島と萬葉集のことなど」

元九州歴史資料館副館長

当館専門委員

庄野 寿 人 氏

「閨秀 亀井少琴伝」

当館亀陽文庫理事長

なお、少琴伝は全稿5〜6回つづきで掲載します。内容は筆者多年の資料探索により充実したものであり、皆様の御期待にそえる、といわれています。

今季の展示品の見どころ

○多々羅義雄展(第3展室と玄関ホール)

海(能古北岸) 50号2点

裸婦 40・20・15号各1点、10号2点

肖像(青年座女優不二子像) 50号

〃(兄光像。自画像。母像) 各1点

関連特別資料

義雄母から義雄宛の書簡(義雄の上京修業中に、毎月欠かさず送金に付した母の手紙。)

○亀井少琴展(第2展室)

四君子画 六曲屏風

竹画 仙厓賛 掛幅

○藩窯高取焼

藩窯ならでは、とされる銘品多数

編集後記

・創刊号のあいさつに代えて・  
題材も寄稿者にもバラエティがあり、しかも毎号の積み重ねが、また魅力がある。これを本誌の第一義にして編輯します。

先々、一寸ヒマな時に、また小旅行に持って出て読まれ、或いは読みかえして味のある博物館だよりにしたいのです。こうなった時に、能古博物館は必ず皆さんに愛される一つの場になっていると信じます。そこで能古博物館も多くの方々や各種のグループにいろいろな利用のされ方をするようにと思いますが、皆さんに楽しい企画とサービスを提供いたします。

季誌の御愛読と、能古博物館の御利用をお願いいたします。(編集委員)

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜(月曜が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月2日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜能古行渡船場→フェリー(10分)→  
能古(徒歩5分)→博物館  
〒814 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2887・FAX(092) 883-2881